

病院空間における美術の役割

—高知大学医学部附属病院における美術の活用と作品鑑賞の教育効果の検証—

吉岡 一洋、土井原崇浩、野角 孝一、中村 るい、柴 英里

(人文社会科学系教育学部門)

利岡加奈子 (医学部・病院事務部)

The Role of the Arts in Hospital space : A practical use of the arts at the Kochi University Medical School Hospital and an evaluation of the educational effects of art appreciation

Kazuhiro Yoshioka, Takahiro Doihara, Kouichi Nozumi,
Rui Nakamura, Eri Shiba

(Research and Education Faculty, Humanities and Social Science Cluster, Education Unit)

Kanako Toshioka

(Kochi Medical School Hospital, Kochi University)

要 約

本研究は、高知大学において絵画・デザイン・美術理論を担当する教員及び学生と、高知大学医学部附属病院（以下、附属病院と記す）の職員（学芸員資格を有する）が美術作品による展覧会「ドロイング展」を企画・開催することで美術の現場と医学の現場をつなぐ試みである。これまでに高知大学において美術分野と医学部が学際的に協働する例は少なく、授業作品が医学部で発表されるケースは今回がはじめてのことである。病院空間における美術の役割を考えると、ホスピタルアートに対する深い理解は必要不可欠のものである。病院は公共性の高い場所であり、鑑賞者は通院・入院患者やその家族、病院関係者という特定されるため、その対象に寄り添うことを意識しなければならない。表現する上で鑑賞者や環境に配慮していくことを教育上のテーマとし、同時にホスピタルアートと今日的な美術の諸課題・可能性について追求していく。

キーワード：美術、デザイン、鑑賞教育、アート、ホスピタルアート

1. これまでの経緯

まず、本研究のきっかけとなった「日本画と版画展」について事例的に紹介する。これは高知大学教育学部1号館エントランスホールで会期2016年2月5日～2月18日で開催された。本展覧会の出品作品は教育学部芸術文化コースの専門科目である「日本画基礎」と「版画基礎」を履修する学生の授業作品を展示したものである。「日本画基礎」では水干絵具という絵具を用いて、写生に基づいた技法や描写を学ぶ。また、「版画基礎」ではシルクスクリーン（孔版）とサイアノタイプ（無版）という版画技法の習得を目指している。双方の授業は、具象的或いは抽象的に作品表現を行い、試行錯誤しながら作品を完成させている。

両授業はこれまでも完成した作品は授業16週目に講評会を行い、学生への授業の感想とフィードバックを行ってきたが、展覧会という形で終わることはなかった。今回は成績評価の対象とはせず評価の参考という程度で展覧会への出品を要請した。この展覧会では芳名録は置かず、変わりに自

由に記述できるノートを会場に設置した。展覧会の記録、まとめとしては集計数が少ないが、「これからも楽しみにしています」「皆の作品が見られて純粋に嬉しい」「個性ある作品にみとれていました」「毎日鑑賞させていただきました」など概ね高評価であった。また、口頭でも「学内で作品が見られるのでとてもありがたい」といった評価があがった。これらの評価を総括すれば、学内で美術展を開催することは日頃の学習成果の発表の場として有意義であったこと、授業成果の公表は授業公開（ピア・レビュー）としての効果があることがわかる。また、展覧会活動そのものがアクティブ・ラーニングになっているともいえる。「日本画と版画展」の広報活動はDMでの案内と高知大学のホームページに掲載、教育学部内にポスターの掲示がある程度であったが、会場が教育学部1号館エントランスという比較的人通りの多い場所でもあったため学部内の教職員・学生の目に触れる機会が多かったのではないかと考える。この展覧会を契機として、附属病院から展覧会企画の提案があり、実施に向けて準備を開始した。（吉岡・利岡）

2. 研究の目的

先述したように本稿でのホスピタルアートとは鑑賞者や環境に配慮した表現であると考えている。これまでの芸術文化コースの授業は展覧会或いは演奏会を目標にした技術指導を行い、技術指導・作品鑑賞を通じた多様な表現手法や美的感覚の熟達を目指してきた。それは美術館や画廊・ギャラリー・演奏会会場・コンサートホールといった場所での作品発表であったため、学生にはホスピタルアートに対して経験則から解する以上の十分な知見があったとはいえない。

先行研究としてデザイン分野を中心として活動を行った筑波大学附属病院リニューアルプロジェクト（渡・貝島・三友・一ノ瀬・河村・土岐・高岡、2005）などがある。それを踏まえ本研究では絵画・デザインによる作品を附属病院で発表することを念頭において、表現活動を行うことへの意識の変化について検証したい。また、附属病院で展覧会ディレクションを行うことの意義についても考察していきたい。教員間、教員と学生間でも省察する契機としたい。

3. 授業概要について

本プロジェクトは次の3つの授業を軸にして作品制作の指導を行うものである。授業は「西洋画専門」「日本画応用」「デザイン専門」である。これらの科目は主として教育学部生涯教育課程芸術文化コースの選択必修科目であり、3・4年生が履修する科目である。

3-1. 西洋画専門

「西洋画専門」はヨーロッパの巨匠作品（主に印象派）から各学生が作品を選び作品模写を行うものである。欧州の美術館に所蔵されている巨匠絵画を模写し、その伝統技法や画家の感情を読み解きながら模写作品を完成させる授業である。授業科目の到達目標は次の5つを設けている。①西洋画のマチエールや技術を学び、理解できるようになる。②構図法や空間意識を思考するようになる。③必要に応じて文献及び資料(画家の背景等)を収集し、活用する意欲を持つようになる。④西洋画制作に集中し、素直な姿勢や態度をもつようになる。⑤西洋画に関する高度な技術を適切に身に付け、活用できるようになる。以上の到達目標を踏まえた授業シラバスは下記である。

【表1】西洋画専門の授業シラバス（一部）

制作予定	授業内容
第1回	授業ガイダンス
第2回	模写用作品（原図）の選択。原図のトレースアップ作業

第3回	キャンバスにトレースダウン作業
第4～7回	形、明暗、空間感、質感に注意を払い制作
第8回	中間講評
第8～12回	形、明暗、空間感、質感、重量感に注意を払い、特に巨匠の感情を想像しながら描く
第14回	作品の完成へ
第15回	作品講評
第16回	作品の搬入・展示

模写作品は本物と比べれば、全く同等とは言えないかも知れないが、その存在価値は大きい。模写作品であっても、鑑賞者の心を揺さぶり、感動することがあるからである。模写する学生がその作業中に巨匠の息遣いや心情を感じとり、絵具の色や筆致を同化させて行くことで、巨匠の制作を追体験できる。模写作品の域を超え、作品そのものが新たな命を与えられたが如く、出現する瞬間がある。その様な模写作品は、院内展示を觀られた方々の心に良い影響を及ぼすと考える。絵画は一瞬でもいろいろな感情や幸せを運んでくれると思うからである。(土井原)

3-2. 日本画応用

日本画応用では百合をモチーフとした日本画制作を行っている。授業の到達目標は次の5つを設定している。①モチーフをよく観察し、それを細密に写生することができる。②膠の特徴を理解し、扱うことができるようになる。③基本的な水干絵具の扱いができるようになる。④基本的な岩絵具の扱いが出来るようになる。⑤色や形を通して、自分なりの表現が出来るようになる。以上の到達目標を念頭に置いた授業シラバスを以下に示す。

【表2】日本画応用の授業シラバス（一部）

制作予定	授業内容
第1回	授業ガイダンス・準備物の説明
第2～5回	モチーフの写生
第6回	和紙の水張り。写生をトレスシングペーパーに転写する
第7回	下図を和紙に転写し、骨描きを行う。作品の中間講評
第8回	墨ぼかし、胡粉下地を塗る
第9回	地塗りを施す
第10回	モチーフの下塗りを行う
第11～15回	モチーフの描写を行う
第16回	作品の搬入・展示

例年の授業であれば、学生の主体性に任せているため、表現方法についての指導を行わない。しかし今回の授業では、通院・入院患者やその家族、病院関係者が鑑賞されることを念頭に置いたため、特に背景の色は明るい色を選択するようにガイダンスで説明した。人によって色の印象や感じ方も異なり、明るい色を使うことによって、必ず明るい印象の作品となるとは言えない。しかし暗い色を背景に使うより、明るい色を背景に用いることによって、画面全体の印象を明るく感じさせる助けとなると考えられる。また第7回では作品の中間講評を設け、描かれたモチーフの形や構図の再確認を行い、学生自身が作品の精度を上げるためにはどうすれば良いか考え、それを共有する工夫を行った。(野角)

3-3. デザイン専門

デザイン専門ではキーワードとしてDTP (Desktop publishing)、クロスメディア表現、CI (Corporate Identity)、VI (Visual Identity)、等々をあげている。また、授業全体の概要はグラフィックデザインの実践的な作品制作を行うことを軸として、学内外のデザイン要請にも積極的に取り組んでいくこととしている。今回の場合は病院空間でのアートディレクションであり、通常のアートディレクションに加えてホスピタルアートや病院とアートの関係について考えながら実践した。デザイン専門はデザイン系実習科目の集大成としての位置づけもあり、本研究のような実践は、以下に示す授業の本旨とも一致している。

【表3】 デザイン専門の授業シラバス（一部）

制作予定	授業内容
第1回	授業ガイダンス
第2回	制作のスケジュール調整・各種役割分担（ポスター、DM、キャプション、リーフレット、目録） 展覧会タイトルの決定
第3回	タイトルロゴの提案、デザインゼミ3,4年生合同によるゼミ企画について検討
第4～7回	ポスター・DM用の写真撮影、ポスターの仮刷り
第8～10回	ポスターの校正（仮出し）～校了
第10～12回	DMの校正～校了
第12～15回	リーフレット、目録、キャプションの制作～校了・入稿準備
第16回	作品の搬入・展示

本授業では、【表3】の授業計画にそって展覧会全体のアートディレクションを行う。ポスター、DM、キャプション、リーフレット、目録等のデザインアイテムについてVIを意識してデザイン案を提示する。

授業5週目にピア・レビューを実施した。デザイン専門の授業に対しては展覧会ディレクションの要となるキャッチコピーの考案について示唆があった。キャッチコピーを考えることは展覧会のテーマを深く考えることであり、ポスターやDMのメインビジュアルの作成段階で重要なプロセスとなった。

デザイン専門の授業と関連させて、デザイン研究室に所属する学生7名によるテーマ「色と野菜」についてポスター作品を制作した。テーマの設定理由として、カラフルな色彩と食と健康を想起できる野菜をモチーフとすることとした。（吉岡）

4. プロジェクトについて

本プロジェクトは教育学部と附属病院が連携するはじめての試みであるため、会場の下見（ピクチャーレールの確認等）や企画段階からのスケジュールの調整を要したため、概略について【表5】にまとめている。

【表5】 プロジェクト概要

日程	内容
2016年4月8日	第1回の展覧会に向けた打ち合わせ
2016年4月20日	第2回の展覧会に向けた打ち合わせ・会場下見（外来診療棟1階・2階）
2016年4月22日	展覧会までのスケジュールを確認する（デザイン専門）

2016年5月10日	展覧会概要と学生作品等について意見交換・打ち合わせ（高知大学教育学部）
2016年5月20日	各授業の実施状況についてピア・レビュー（美術系教員）
2016年7月7日～	各授業の作品内容について大学病院で確認を行う
2016年8月6日	作品搬入・展示
2016年8月29日	関係する教員による鑑賞
2016年9月22日	次回展覧会に向けた打ち合わせ・今後の課題や提言をまとめ検討する
2016年10月26日	作品搬出

5. アンケート調査結果について

展覧会開催期間中、展覧会鑑賞者が自由に手に取ることのできる質問紙とその回収箱を附属病院内に設置した。2016年8月31日～9月8日までに回収箱へと投函された記入済み質問紙の総数は41であった。回答者の性別は、男性9人（22.0%）、女性32人（78.0%）であった。回答者のうち、一般の者は5人（12.2%）、大学生1人（2.4%）、教職員・医療従事者34人（82.9%）、その他1人（2.4%）であった。

病院内でアート作品を展示することの必要性について、「1 まったく必要ではない」「2 多少必要である」「3 かなり必要である」「4 必要である」の4段階で尋ねた結果を図1に示す。また、今後、病院内で美術展が開催されることについて、「1 開催する必要はない」「2 開催してもよい」「3 できれば開催してほしい」「4 ぜひ開催してほしい」の4段階で尋ねた結果を図2に示す。病院内にアート作品を展示する必要はないと回答した者や、今後、病院内で美術展を開催する必要はないと回答した者はおらず、展覧会鑑賞者は、病院内でアート作品を展示することの必要性を高く評価していることがうかがわれた。今後、病院内での展覧会が鑑賞者にどのような効用をもたらすかについて、さらに詳細に検証する必要がある。（柴）

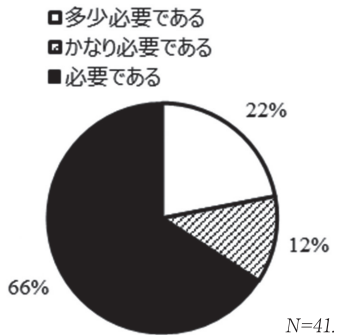


図1. 病院内でアート作品を展示することの必要性

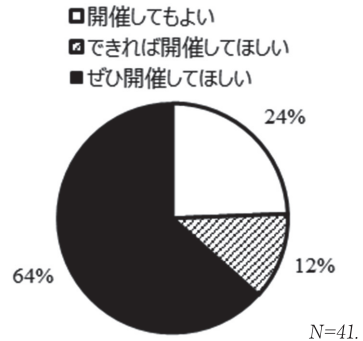


図2. 今後、病院内で美術展が開催されることについて

6. 考察

アートは社会に対して、どのような役割を果たすことができるのだろうか？

ここ20年ほど、病院空間におけるアートの展示が活発になっている。たとえば、病院的待合室で、心地よい色彩の絵画などを見ると、気持ちが和らぐことは、多くの人が経験しているだろう。ただし、何が好ましいかは、人により異なり、決して画一的なものではない。そのため病院などの公共空間に展示する場合は、多くの人が快適と感じられる色彩や形に配慮することが不可欠となる。

このたび、高知大学教育学部の芸術文化コースでは、附属病院の依頼により、病院の空間に、授業で制作した作品を展示した。展示に先立ち、各授業の担当者と授業の5週目（2016年5月20日）に中間報告の会合をもち、病院空間にふさわしいアートについて話し合い、また作品制作の進行状況の確認を行った。病院空間に展示されるアートは、「ホスピタルアート」と呼ばれ、最近、研究が精力的に行われるようになった。この分野の博士論文も提出され（註1）、課題等が明らかにされつつある。大学と地域の病院が協力して、病院空間にアートを設置する試みは各地で行われている（註2）。そのほか、医療従事者へ、アートの豊かさを紹介する紙面企画も行われるようになり、筆者（中村）もその一端に関わっている（註3）。



展示の様子（2016年8月29日）

国内だけでなく、海外でも、治療の場にアートを導入する動きは活発になっている。例えば、英国のチェルシー・ウエストミンスター病院は先進的な取り組みで知られ、視覚とアートを組み合わせ、癒しの環境をつくるという明確な目的のもとに、院内にアート作品を配置している（註4）。

病院空間にかぎらず、アートが社会に果たす役割が大きいことはいまでもない。ただし、アートがどのような効果をあげているか検証することは難しい。単純に数値化できない質的效果が存在するからだ。現在ともすれば、数値化できない価値を軽視する傾向があるが、アートの豊かさを認識し、評価することも、今後のホスピタルアートの重要な課題だろう。

会期が3週間目に入る時期に、担当教員と附属病院に向向き、展示を見学した（8月29日）。第一印象は、日本画の百合の描写が、病院空間に穏やかで明るい彩りを添えていることだった。空間に心地よい雰囲気を作り出していることが確認できた。一方、作品がかなり広い範囲に分散しており、さらに、展示の位置が高かったので、作品と鑑賞者の間に心理的な距離があるように感じられた。来年度以降、附属病院側の意見もよく聞いて、患者さんが参加できる、近づきやすいものを目指すというやり方もあるかもしれない。

アートは私たちの感性に働きかけ、生活を豊かに彩る。今回の芸術文化コースによる、附属病院での作品展示は、さまざまな可能性を秘めた新しい試みといえよう。（中村）

7. まとめ

本稿では「ドローイング展」を総括することを中心にまとめてきた。展覧会の企画は附属病院を利用したはじめての試みということもあり、芸術文化コースがもつ教育ノウハウの蓄積とは異なる部分もあった。美術教員が各授業の内容を展覧会開催のために評価・確認することからスタートした。

本展への出品作品をあげる。油彩画（西洋画専門）、日本画（日本画応用）、ポスター・版画（デザインゼミ活動、デザイン専門）など40点である。

病院内での作品展示の意義や課題を再確認することは、展覧会ディレクションをする上でも作品制作の上でも様々な事柄を考える契機となった。病院内では「待ち時間をどう過ごすのか」「不安な気持ちにどう寄り添えばいいのか」という潜在的な課題がある。美術系教員が中心となり授業作品

を制作・発表するプロセスの中にホスピタルアートという軸を付加して連携を試みた。附属病院のホスピタルアイデンティティに本展は沿っているのか、美術作品と病院空間に十分な空間づくりはできていたのか、などの課題が浮き彫りになった。

また、各授業の項で述べたように、従来からある授業シラバスを本展のテーマに沿わず形で実施してきたが、いざ出品する段階で附属病院側との確認が不十分であったため、作品の一部を控えることとなった。これは美術教員と附属病院側で展覧会の趣旨やテーマについて十分なコンセンサスがとれておれば未然に防ぐことができたであろう。本稿は「ドローイング展」の総括であるが、準備から展覧会の会期を通じてわたしたちに問われてきたことは、美術は病院内でいかにあるべきか、いかに美と医の相互関係を築くことができるのかである。同時に今日の美術の社会的意義についても深思した。一般に美術とは作者が自己の表現や意思・思考を可視化・表現するものと考えられている。他方でホスピタルアートでは作者は他己の想いや気持ちに寄り添うを感じ援用することで自己表現とする。前者を「自己美術」、後者を「他己美術」と定義することがホスピタルアートを理解する際の手がかりになるのではなかろうか。

病院内において作品をもとにしたコミュニケーションの形成という意味では、新たな価値の創造の一助になったのではないかと思う。

今後はヘルシーエイジングや健康というテーマで、芸術分野からアプローチして、芸術が人間の身体や精神にどのように影響するのかについて、高知大学の医学部と芸術分野の教員の連携強化により、教育研究資源を活かして共同研究をすすめていくことになろう。本稿は、以上で述べたような諸課題に対する初発的な研究である。連携や協働という言葉を実に深く受け止め、実践するためには、時間をかけた継続的な活動が必要だと考えている。

謝 辞

本研究を進めるあたり、医学部との連携と様々な調整に対してご理解とご協力を賜った附属病院の関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

注

- (註1) 吉岡聖美『ホスピタルアートとしての絵画の印象評価に関する研究：視覚的造形的要素の分析を中心に』(筑波大学博士論文 2011年)。
- (註2) 三浦賢治「ホスピタリティアート・プロジェクトワークショップ・展示～金沢市立病院における実践から～その2」『金沢美術大学紀要』57(2013), pp. 61-67.
- (註3) 『小児歯科臨床』Vol.15, No.12(2010年12月号)[特集：子どもと色の世界], pp.15-53.
- (註4) 吉岡聖美『ホスピタルアートとしての絵画の印象評価に関する研究』(註1), pp. 14-21.

参考文献

- ・岩田弥富『芸術選書7 造形的修練としての素描論』芸大出版会 (1971年)。
- ・渡和由・貝島桃代・三友奈々・一ノ瀬彩・土岐文乃・高岡明日香編『Art Design Produce2005筑波大学アート・デザインプロデュース2005』平成17年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」採択 アート・デザイン教育による3C力の育成—大学を開き地域を活かすプロセス参加型実践教育プログラム, 2006年3月
- ・板東孝明『ホスピタルギャラリー』武蔵野美術大学出版 (2016年)